

# 建言我一心

安藤文雄

## 序

本論稿は、第三十七回印度学仏教学会学術大会での発表  
『印度学仏教学研究』第三十五卷第二号に掲載)に続いて、『教  
行信証』信巻を中心に、親鸞における信心の問題を課題的  
に考察するものである。今回は特に善導の『観経疏』三心  
積、源信の『往生要集』正修念仏門の文によって親鸞が何

を問題としたのか、また三一問答字訓釈と、仏意積の信楽  
積において親鸞が何を明らかにしようとしているかという  
ことを考察する。「建言我一心」とは、信巻において親鸞  
がその要処に結論的に語ってくる一句である。「故に論主、  
建に我一心と言へり」という、『浄土論註』下巻起観生信  
章讚嘆門釈下の問答の結論は、親鸞にとって信心を思索す

るについての重要な指標であったと思われる。この課題性  
を結論的に言うならば、親鸞にとって、信心は自明の宗教  
心情ではなく、人間にとって未知なること、教示されるべ  
きこと、「獲得」すべきこととして考えられていたという  
ことであり、そこに信巻における大部にわたる要文類聚と  
問答が必然したのである。

『論註』の文に関する考察は、先に指示した論稿を参照  
していただきたい。今回は、その論稿を受ける形で、親鸞  
における信心の問題を取り掲げていくことにする。

## 一

『教行信証』信巻で『論註』の文によって問われた信の  
課題は『讚阿弥陀仏偈』の偈頌によって、一心が本願成就

の信心であることが指示されて一旦結ばれる。では「建言我一心」として語られる信心の内実とは何かが改めて問題となる。この課題を確かめるのが善導の『観経疏』三心釈を中心とする諸文であり、また源信の『往生要集』正修念仏門の文である。

『教行信証』信巻における善導の『観経疏』三心釈は本文の訓み替え、化身土巻への分判等の慎重な配慮のもとに文類されている。また、この三心釈に続く『般舟讚』、『往生礼讚』の文は、親鸞が三心釈の結集するところがどこにあるかを明示したものである。なぜこのようなことが必然するののか。

『観経』の三心は善導によれば、

正明<sup>下</sup>弁<sup>二</sup>定<sup>三</sup>三心<sup>一</sup>以為<sup>中</sup>正<sup>上</sup>因<sup>①</sup>

ということにおいて教説される仏説であり、その「弁定」の内実は、

一 明<sup>ニ</sup>五世尊<sup>随<sup>テ</sup>機<sup>ニ</sup>顯<sup>コト</sup>益<sup>ヲ</sup>意<sup>ニ</sup>蜜<sup>ニ</sup>難<sup>ニ</sup>知<sup>リ</sup>非<sup>ニ</sup>仏自問自答<sup>ニ</sup></sup>  
チホウシヨクマフニキヤラシニ 無<sup>由</sup>由<sup>三</sup>得<sup>二</sup>解<sup>一</sup> 二 明<sup>三</sup>如来還自答<sup>三</sup>前<sup>二</sup>三心<sup>一</sup>之<sup>二</sup>數<sup>ニ</sup>  
チホウシヨクマフニキヤラシニ 無<sup>由</sup>由<sup>三</sup>得<sup>二</sup>解<sup>一</sup> 二 明<sup>三</sup>如来還自答<sup>三</sup>前<sup>二</sup>三心<sup>一</sup>之<sup>二</sup>數<sup>ニ</sup>

という、大聖世尊の「自問自徴」、「還自答」として、釈尊が自ら問い自ら徴し、再び自ら答えたもうこととして、「経に云く、一者至誠心……」<sup>③</sup>と説示されることになった

往生の正因である。

三心既具<sup>ニ</sup>無<sup>三</sup>行<sup>一</sup>不<sup>二</sup>成<sup>三</sup>願行既成<sup>ニ</sup>若不<sup>二</sup>生<sup>三</sup>者無<sup>三</sup>有<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>処<sup>一</sup>也<sup>④</sup>

と結論されてくるように、三心を弁定するとは同時に「正因」が明らかになることの他にはない。しかしこのことは「意蜜にして知り難し」と語られるように、人間において未知なることであり、そこに信巻序に示された「大聖矜哀の善巧」<sup>⑤</sup>に従る「真心」<sup>⑥</sup>の「開闡」ということが、まず確認されているのである。『観経疏』三心釈が化身土巻に分判されてくる必然性もここにかがえる。信巻においては「真心を開闡する」ことが自証されていくと共に、そのことを為さしめる「大聖矜哀の善巧」が自利各別の三心の否定として、化身土巻に分判されていくのである。

また『論註』、『観経疏』の展開の次第は続く三一問答を想起せしめる。字訓において一心を問う第一問答、一心において本願の三心を問う第二問答、それは『論註』の問答、『観経疏』三心釈の展開次第に負うところが大きいことは明らかである。特に『観経疏』三心釈は、それが真假分判のもとに為される要文類聚であることにおいて、「至心 信 樂 欲生」の本願の三心に直結している。『観経』の三心、「至誠心 深心 廻向発願心」と、『大経』の三心、「至心



に至っての左仮名であり、ここに信巻における『観経疏』三心釈との呼応を見ていけるであろう。「内ニアラハス」とは確かに「顕彰隱蜜」に対応した言葉であろうが、「如来の弘願」が我々にどのように明らかになるのかを物語る言葉であろう。それは単に心理内在的な意味での内ではなく、「至心信樂之心」であり、「本願の三心」である。存在情況において散乱鈍動する我々の分別主観を外に破って念仏往生の一道に立たしめる往生の「正因」としての信心である。「内ニアラハス」ことにおいて『大経』の三心と『観経』の三心が一つであると言わなければならないのは、人間存在自身に直屬して、「正因」を阻害していくということがあるからである。自利各別の三心に依拠して生きていく人間にとって、「如来の弘願」、「利他通入の一心」は未知なることとしてあり、ここに「大聖矜哀の善巧」に従る徹底的教化が必然するのである。このような教化を身に受けての自覚表現が真仮分判ということである。自利各別の心根が洗い出されて、新しい自己が見出されていくところが真仮分判ということがある。

「内ニアラハス」とは、真仮分判が人間の自覚を離れてはないということであるが、それは人間の心理情況の分析ではなく、「速に生死を離れんと欲」<sup>⑩</sup>うという要求におけ

る往生の正因の問題であり、往生の主体が根源的に問われることにおいて、そこに決定的な転換を成就していくという質の問題である。

その意味において、信巻所引の『観経疏』三心釈は、確かに自己を見据え凝視することが重大な契機となっているには違いないが、その眼を切り開くのは大聖世尊の教意である。それは自意識による無限反省ではなく、自己の存在性に迷惑し自己に踟躕することを内から批判し、人間を能動的存在たらしめていく、「大聖矜哀の善巧」に従る真実信心の開闢という主題の展開であると言わなければならない。

親鸞はこの善導の『観経疏』三心釈の教示する本質を、『般舟讚』の偈頌によって、

敬白<sup>テ</sup>ニ一切往生<sup>ニ</sup>知識等<sup>ニ</sup>大須<sup>ニ</sup>慚愧<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>積<sup>ニ</sup>迎<sup>ニ</sup>如来<sup>ニ</sup>実<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>慈悲<sup>ニ</sup>父<sup>ニ</sup>  
母<sup>ニ</sup>種種<sup>ニ</sup>方便<sup>ニ</sup>発<sup>ニ</sup>起<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>無上<sup>ニ</sup>信心<sup>ニ</sup>

と讃詠し、その「無上信心」の内実を総括する形で、『往生礼讚』の深心釈を以って改めて善導の信心に関する主題を結集してくる。すなわち、『観経』の三心は往生の正因を弁定するための教説であり、この三心の具足として成就されるべきことは無上信心の発起であり、無上信心とは

『観経』の三心に即して語るならば、二種深信であるといふことが、この善導の一連の諸文を通しての親鸞の結論である。『観経疏』三心積の一一の文にわたっての検討が必  
要とされるところであるが、そのことに関する考察は機会を改めたい。

(註) 『西方指南抄』三機分別に法然の次のような法語が記録されている。

そのゆへは、もとより三心(『観経』の三心)は本願に  
あらず、これ自力なり。三心の自力なりといふは、本願の  
つなにおびかれて、信心の手をのべてとりつく分をさすな  
りとことらうべし。(定本巻五、一九五頁)

二

続いて親鸞は『往生要集』正修念仏門の文によりながら、  
信心が菩提心であることを明らかにする。最初に類聚される『華嚴経』入法界品の文は『往生要集』では作願門における発菩提心の利益を証明するための経文であるが、信巻の展開においては一心、二種深信として性格づけられる信心こそが、仏道を決定づける菩提心であることを明示しようとする文になっている。源信において信心と菩提心について、どのように考えられていたか問題があるところであ

るが、たとえば親鸞が三一問答信業積に取り掲げる『涅槃経』の一文について、源信は重要な示唆を与えている。

『往生要集』助念方法門で、源信は次のような問答を説  
けている。

問。既知、修行惣有ニ四相。其修行時用心云何。答。  
『観経』云。「若有二衆生、願レ生ニ彼国者、発ニ三種  
心、即便往生。一ニ至誠心、二ニ深心、三ニ廻向発願心。」  
善導禅师云。「一ニ至誠心、謂礼拝・讚歎・念観三業、  
必須ニ真実ニ故。二ニ深心、謂信下知自身是具ニ足・煩惱  
凡夫、善根薄少、流ニ転ニ三界、未レ出ニ火宅。今信知弥  
陀、本弘誓願、及下、称ニ名号、下至十声一声等上、定得  
往生。乃至ニ一念ニ無レ有ニ疑心。三ニ廻向発願心、謂所  
作一切善根、悉皆廻向、願ニ往生ニ故。具ニ此三心ニ必  
得ニ往生。若少ニ一心一即不レ得レ生。」『鼓音声経』云。  
「若能深信無ニ狐疑者、必得ニ往生。阿弥陀仏云。」  
『涅槃経』云。「阿耨菩提信心為レ因。是菩提因、雖ニ  
復無量、若説ニ信心、則已撰尽。」上明知、修レ道以レ  
信為レ首。

この問答は具体的な修道生活の相貌を、長時修・懸重  
修・無間修・無余修の四修に限定することによって明らか  
にするために、行者の用心を問う問答である。この問答で

は直接に菩提心が主題になっていっているわけではないが、『観経』の三心を中心とした信心の領解が『涅槃経』の経文に総括されていくという展開に、信心が菩提心である、信心が無上仏道を成就する唯一の因であるという主題を読みとることができるよう思う。

菩提心の問題に関しては、明恵高弁の論駁が想起されるところであるが、情况的には当時の仏教界に『摧邪論』の影響が多であったとしても、親鸞に明恵の『選択集』指弾に対する弁明という意識があったか否かは疑問である。

「発菩提心無要」と言い切る『選択集』を付嘱された親鸞にとって、菩提心の問題は明恵に指摘されるまでもなく重要な課題であったことは明らかである。

正法の時機とおもへども

底下の凡愚（おろしやう）となれるみは

清淨真実（きよむねまこと）のころなし

発菩提心（はつぼつしん）いかせむ

自力聖道の菩提心

ころもことばもおよばれず

常没流転（じょうぼつりゅうてん）の凡愚（おろしやう）

いかでか発起（はつし）せしむべき（せしむべき）

三恒河沙（さんごうさ）の諸仏（しよぶつ）

出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども

自力（じりき）かなはで流転（りゅうてん）せり（せり）

親鸞のこの三種（さんしゆ）の和讃（わさん）は、大乘（だいじやう）仏教の理想を上昇飛行的に高揚しつつも、結果として流転を必然していく「発菩提心」の在り方への悲嘆である。教理的には様々の論議はあ

るとしても、道心堅固ということと自他共に菩提心を受けとめていくしかない「自力聖道の菩提心」の質が、この三首の和讃に浮き彫りにされている。自己が自己の存在性を一抛に包摂して超躍しようとすることの不可能性を親鸞は見抜いていたはずである。「常没流転の凡愚」という存在性を自己の被限定性として抽象化していく限り、そこにおこなわれるいかなる自己保持も虚偽であると見抜いたからこそ、親鸞は「発菩提心無要」と言い切った法然の教説に帰したのである。その限り明恵の批判が何ら『選択集』の本質を突くものでないことは明らかである。実際、親鸞の諸述作には明恵の名も、『摧邪論』も一度も登場してこないのである。

我々が親鸞に見ていくべきことは、「発菩提心無要」と言い切られることにおける菩提の身証ということである。

九十五種世をけがす

くまのうのかすのおほきなり

唯仏一道をよくます

菩提に出道してのみぞ  
菩提の利益は自然なる  
 火宅の利益は自然なる

「唯仏一道」に値遇し、「唯仏一道」に帰することの他に「菩提に出道」することはない。親鸞にとつて法然との値遇の内実が「唯仏一道」への帰入であった。それは自己に仏教を包摂することではなく、「唯仏一道」に自己が見出されることである。「底下の凡愚」という存在性を廃することなく、その存在性こそ仏道成就の必然性を見出すこと、そこに法然による浄土宗独立という事業があつたのである。従つて、貞慶、明恵等に代表される浄土宗への指弾も、

菩提をうまじき人はみな

専修念仏にあだをなす

頓教毀滅のしるしには  
生死の大海きわもなし

と言い切られてくることになるのである。たとえ発菩提心の重要性がどれほど強調されようと、自己保持的な個人の道心堅固性に依拠している限り、発菩提心は一旦、無要と言ひ切られなければならない。発菩提心は「聖道権仮の方便」と言ひ切られなければならない。たとえ、仏教の名の

もとにてはあれ、個人としての特権性が一切無化されるところにのみ、大乘の仏道の興起がある。その意味で個我への執心を無限に否定されて、現在する自己を新たに獲得していくことの他に菩提心も明らかにはならないであろう。

このような課題性から改めてこの『往生要集』の文の信巻の位置づけを考へてみるならば、菩提心ということは一、二種深信と確かめられる信心として成就するという親鸞の積極的領解をうかがうことができるように思われる。

一切煩惱諸魔怨敵所不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>壞<sub>一</sub>

入<sub>二</sub>生死海<sub>一</sub>而不<sub>二</sub>沈没<sub>一</sub>  
 於<sub>二</sub>無量劫<sub>一</sub>一<sub>レ</sub>死<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>死<sub>ニ</sub>中<sub>レ</sub>諸煩惱業<sub>一</sub>不<sub>二</sub>能<sub>二</sub>斷滅<sub>一</sub> 亦無<sub>二</sub>損滅<sub>一</sub>

と、入法界品の經文によつて説かれてくる菩提心としての信心の性格は、煩惱を廢しての自己保持的道心ではなく、煩惱の身に落着した心とでもいふべきものである。親鸞がこの菩提心積に續いて『往生要集』の『觀經』「念仏衆生撰取不捨」の積文である、

我亦在<sub>二</sub>彼撰取之中<sub>一</sub> 煩惱<sub>二</sub>瞋<sub>二</sub>眼<sub>一</sub> 雖<sub>二</sub>不<sub>二</sub>能<sub>二</sub>見<sub>一</sub>  
 大悲無<sub>二</sub>倦<sub>一</sub> 常照<sub>二</sub>我身<sub>一</sub>

の一文を重視しながら類聚してくる必然性もここにかがえる。煩惱に無碍なる主体の成就とは、煩惱を廢しての自

己高揚としてあるのではなく、人間が人間であることに正直な眼を開き、今現在する自己の事実を一步一步生き切っていくことの他にはないであろう。

またこの文は、釈文引証の締めくくりの文として、その始めに『浄土論註』において出された、

然有<sup>ル</sup>稱名憶念<sup>ニ</sup>而無明由存<sup>レ</sup>而不<sup>レ</sup>滿<sup>ニ</sup>所願<sup>者</sup>何<sup>ヲ</sup>

という問いに対する結論でもある。この問いにおいて迷惑され続けていた「我身」こそは、同時に無倦の大悲に常照されている「我身」であった。ここに一心、二種深信、菩提心と確かめられてきた信心は、所照の自覚として結論されるのである。無倦常照の大悲によって、我性としての境界が限りなく破られて、自我分別性においては未知なる今現在する自身の獲得、それが源信の信の表白を以って親鸞に領かれた信心の内実であったのである。

三

『教行信証』信巻において、一心、二種深信、菩提心という、親鸞による信心の確かめは、その信巻序冒頭の、

夫以<sup>テ</sup>獲<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>信<sup>ヲ</sup>樂<sup>ニ</sup>發<sup>ス</sup>起<sup>ス</sup>自<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>來<sup>ニ</sup>選<sup>ニ</sup>願<sup>ス</sup>心<sup>一</sup>開<sup>ニ</sup>  
闢<sup>ス</sup>真<sup>ニ</sup>心<sup>一</sup>願<sup>ニ</sup>彰<sup>セリ</sup>從<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>聖<sup>ニ</sup>矜<sup>レ</sup>哀<sup>ニ</sup>善<sup>ニ</sup>巧<sup>一</sup>

という主題と、

然常<sup>ニ</sup>沒<sup>レ</sup>凡<sup>ニ</sup>愚<sup>ニ</sup>流<sup>レ</sup>轉<sup>レ</sup>群<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>妙<sup>ニ</sup>果<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>難<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>眞<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>樂<sup>ニ</sup>實<sup>ニ</sup>難<sup>ニ</sup>獲<sup>一</sup>

という信巻をはじめの問題提起に端を発している。この主題を一言で言えば『浄土文類聚鈔』の、

緣<sup>ニ</sup>尊<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>悲<sup>ニ</sup>獲<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>仏<sup>一</sup>因<sup>一</sup>

という一句に摂まるであろう。親鸞にとつて獲信とは、如来因位としての自身の獲得に他ならない。しかし、そのことが徹底して「獲ること難し」と言われてくるのは、

何以<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>由<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>來<sup>ニ</sup>加<sup>レ</sup>威<sup>ニ</sup>力<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>博<sup>ニ</sup>因<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>悲<sup>ニ</sup>廣<sup>ニ</sup>慧<sup>ニ</sup>力<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>

という、獲信の全体が如来回向としてあることによる。

獲信とは、親鸞の確かめによればまさに「うべきことをえたり」、「仏にかならずなるべきみとさだまるくらゐ」を獲得するというのである。如来因位の問題は、仏教の通義においては、「自性清淨客塵煩惱」ということで、すでにして修道の大前提として定着してきたことであった。それは獲るとか、獲ないとかいう以前にそれこそが仏教の出発点だったのである。この常識に対して根本から疑問符を投げかけるところに浄土教の出発点がある。たとえどれほどそのことが自明のことと言われようとも、抽象的教理の弁証を除いてはその証拠は具体的にはどこにもない。『選択集』教相章の『安樂集』の文が語るように、この嘘を見抜いた



のが道緯であり、法然であった。因位ということは修道の出発点としての自明の前提ではなくて、課題的に徹底的に問い尋ねられるべきこととしてあるのである。

親鸞による信心を主題としての思索は、獲信が同時に如来因位の獲得であるということを明らかにするためのものである。もちろんここに問題とされる因位ということは、人間に内在化した心境でも、人間の外に抽象化された観念でもないことは明らかである。それは煩惱を具足したまま涅槃に能入する存在性の獲得、一切の現実を自己のことで引き受けて能動的に生き切る主体性の獲得ということである。

獲得ということで信心が語られてくるのは、その全体が如来回向としてあることの明示である。信も因位も、仏教において自明のこととして正面から課題的に問われることのなかった問題である。しかし親鸞はその出発点が不明であるために、仏教が仏教と似て非なるものになってきたことを指摘するのである。親鸞が明らかにしようとする信は、そこから全てが始まるという修道の前段階的意味の信ではなくて、それが全てであるという意味での信である。『唯信鈔文意』の冒頭の「唯信」についての親鸞の註解はこのことを端的に語っている。

唯はたゞこのことひとつといふ、ふたつならばことをきらふことばなり、また唯はひとりといふことばなり。信はうたがひなきことばなり、すなわちこれ真実の信心なり、虚仮はなれたることばなり、虚はむなしといふ、仮はかりなるといふことなり、虚は実ならぬをいふ、仮は真ならぬをいふなり、本願他力をたのみて自力をはなれたる、それを唯信といふ。……また唯信はこれこの他力の信心のほかに余のことならばはずとなり、すなわち本弘誓願なるがゆへなればなり。<sup>⑧</sup>

ここに「唯信」と語られる信こそは、「本願他力をたのみて自力をはなれたる」という「このことひとつ」において、「ひとり」、親鸞一人を成り立たしめる信心である。そしてこの唯信の全体が「すなわち本弘誓願なるがゆへなればなり」と、本願の道理の証明、本願成就として親鸞に領かれていたのである。

『教行信証』信巻の三一門答も、この唯信こそが「涅槃の真因」であることを、親鸞自身の自内証を通して本願の三心に尋ね入ろうとする問答に他ならないであろう。三一問答に関する若干の考察を試みたい。

先に尋ねてきた釈文引証を受けて親鸞は、

爾者若行若信無<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>一事<sup>ニ</sup>非<sup>ズ</sup>阿弥陀如来清淨願心之

所<sup>ニ</sup>三回向成就<sup>一</sup> 非<sup>レ</sup>無<sup>ニ</sup>因<sup>一</sup> 他<sup>ノ</sup>因有<sup>上</sup>也<sup>可</sup>知<sup>一</sup>

として、行信が「阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまふ所」以外の何ものでもないことを明記し、そのことは同時に「涅槃の真因」が成就したことに他ならないことを「知る可し」と強調して、釈文引証全体の結論としている。ここに語られる「非無因他因有也」は『論註』淨入願心章の一句であるが、無因と他因という二つのことを言っているのではなく、積極的に一つのことを語っている。因が無いでもなく、他の因が有るのでもないということとは、「本願他力をたのみて自力をはなれたる」行信こそは、「涅槃の真因」であるという、決定的な唯一の因を語っているのである。その理由は行信が「阿弥陀如来清淨願心の回向成就したまふ所」以外の何ものでもないからであるということだが、この一文の主張点である。

三一問答はこのような確かめにおいて、この結論として出された主題を、

問如来本願已<sup>ニ</sup>発<sup>ニ</sup> 至心信樂欲生誓<sup>レ</sup>何以故論主言<sup>ニ</sup>一心也<sup>一</sup>

問如<sup>キ</sup>字訓<sup>レ</sup>論主意<sup>以</sup>三<sup>ヲ</sup>為<sup>一</sup>義其理雖<sup>モ</sup>三<sup>可</sup>然<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>愚患<sup>一</sup>衆生<sup>ニ</sup>阿弥陀如来已<sup>ニ</sup>發<sup>ニ</sup> 三心願<sup>ニ</sup>云何思念<sup>也</sup>

という二つの問いによって明らかにしようとする問答であ

る。第一問答においては論主の一心が「涅槃の真因」であり、本願成就の信心であることを、至心・信樂・欲生の三字の字訓によって、三心と一心は一つであるという確かめを通して明らかにする問答であり、第二問答はなぜ阿弥陀如来は三心の願を發されたのかという仏意を問うことによつて、一心が發起する必然的の道理性を推求することによつて、「阿弥陀如来の清淨願心の回向成就」という事自体（本願成就）を明瞭にしようとする問答である。まず第一問答を概略的に見ておくことにする。

答愚鈍衆生解了<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>易<sup>一</sup> 弥陀如来雖<sup>モ</sup>三<sup>ニ</sup>發<sup>ニ</sup> 三心<sup>一</sup> 涅槃真因唯<sup>以</sup>三<sup>ヲ</sup>信心<sup>一</sup> 是故論主合<sup>ニ</sup>三<sup>ヲ</sup>為<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>賦私<sup>一</sup> 闕<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>字訓<sup>一</sup> 三即合<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>一<sup>一</sup>

第一問答では本願に誓われた至心・信樂・欲生の三心と、『淨土論』冒頭の「世尊我一心」の世親の一心が同一であるか、否かが問われているのであるが、「涅槃の真因は唯信心を以てす」と親鸞が言い切ってくることに注意しなければならぬ。涅槃の真因は唯信以外にはないという親鸞の自内証において、本願の三心と論主の一心が問われているのである。従つて「三を合して一とせる」ということは論理上の矛盾の弁証ではない。三と一という数の上での矛盾を会通しているのではない。まさに唯信、一心が全てな

のである。至心・信樂・欲生の三心を領知するのは一心のみである。また三心それ自体も「疑蓋無雜」という一点において信樂に摂まり、

真知疑蓋無問雜一故是名信樂一信樂即是一心一心即  
 是真實信心是故論主建言一心也応知一

というように結論されてくるのである。この消息は先に取り掲げた『唯信鈔文意』の文によくうかがわれると思う。

「本願他力をたのみて自力をはなれたる」唯信、一心こそは、「虚仮はなれたるころ」(至心)であり、「うたがひなきころ」(信樂)であり、その全体が「本弘誓願」なる「大悲回向之心」(欲生)なのである。そこに一心、唯信と語られる信心こそが、至心・信樂・欲生を合した信樂であり、涅槃の真因として「建」に建立されるべきこととして明らかにされたのである。

## 四

以上のような確かめを通して続いて親鸞は「阿弥陀如来已に三心の願を発したまへり、云何が思念せんや」と、阿弥陀如来が三心の願を発したもう仏意に尋ねるのである。しかしこのことは『選択集』本願章における称名念仏を選択する願心への問いと同様に、本来問えない問いである。

凡意(凡夫の意)が仏意を問うことは凡意においては成り立ちようがない。なぜ念仏が選択されたのか、なぜ一心が発起したのかという問いは、自己を抜きにして外から問う限り無意味な問いであるし、また信仰体験の分析ということによっても問えない。(信心を自己に帰属する体験として矮小化することは親鸞のもっとも否定するところである。)

そこにこの問いは、

仏意難惻一

と一旦、完全に断念されなければならない。ここに親鸞の使っている「惻」の字はその字義自体は「ハカル」という意味ではなくて、「イタム、カナシム」という意味である。親鸞の諸述作には「測」とすべきところを何ヶ所か「惻」の字に替えて、しかも「ハカル」という訓で使用している。例えば行巻の有名な『大経』の文の、

如来智慧海深広 無涯底二乗非所惻一唯仏独明了

における「二乗非所惻」の「惻」は、原典では「測」となっている。従って親鸞はあえて測ではなく、惻の字を使うことで一つの決定的な問題を明示していこうと配慮しているのではないかと思われる。

決定的な問題とは自力無効ということであり、分限の自覚ということである。

また他力とまふすことは、義なきを義とす、とまふすなり。義とまふすことは、行者のをの／＼のはからふことを義とはまふすなり。如来の誓願は不可思議にましますゆへに、仏と仏との御はからひなり。凡夫のはからひにあらず。補処の弥勒をはじめとして、仏智の不思議をはからふべきひとは候はず。<sup>④</sup>

たゞ不思議と信じつるうへは、とかく御はからひあるべからず候。往生の業にはわたくしのはからひはあるまじく候なり。<sup>④</sup>

この『末灯鈔』の二文からうかがわれることは、仏意をはからうことが決定的に仏意に背くことになるという親鸞の指摘である。このことの問題性は、釈尊の境位を予測して展開してきた仏教の歴史が証明して余りある。深遠を装った教理全体が、仏智をはからう越権の上に成り立って来たことを法然は見抜いたのであり、親鸞もまたこの課題を深めていったことは、『教行信証』化身土巻、正像末法和讃における仏智疑惑の主題によっても明らかである。

親鸞は、「仏意惻り難し」として、三心の願を発したもう仏意を問うこと自体に孕まれている問題を明確にするこ

とによって、すなわち自力の無効性への徹底的的信知において、

雖<sup>モ</sup>三<sup>ト</sup>然<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>竊<sup>ヒツカエ</sup>推<sup>スル</sup>二<sup>ノ</sup>斯<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>一<sup>④</sup>

として、一心を一心において推求していくことによって三心の願意に尋ねるのである。

一般にこのような思惟は内観と言われている事柄であるが、それは決して自我意識への閉塞ではない。自我意識による自己反省、自己凝視である限り、反省する自我、凝視する自我は肯定されたまま残っていく。従って内観といふことは自己が教法に投げ出されることにおいてしかないことである。自我意識に依って生きる在り方の終わり、教法を命として生きる在り方の始まりという、死と再生、そこに内観ということの真相があるのである。善導が明らかにした二種深信、源信の表白する所照の自覚もそのことを端的に語るものであろう。その限り「竊かに斯の心を推する」という思惟は、自己存在に直属した虚仮邪偽が根源から洗い出されて、今現在する存在事実に関が開かれていくという思惟である。それは主観の内なる思惟ではなくて、主観が破られていく思惟である。このような思惟を成り立たしめる根拠、それが選択本願であり、この仏意積ではこのことが阿弥陀如来因位法蔵菩薩の兆載永劫の修行として

見開かれていますのである。

法然は『和語灯録』三部経釈大経釈において、法蔵菩薩  
兆載永劫修行について重要な指摘をおこなっている。

弥陀如来は因位の時、もはらわが名号を念ぜんものを  
むかへんとちかい給ひて、兆載永劫の修行を衆生に廻  
向し給ふ。濁世のわれらが依怙、末代の衆生の出離、  
これにあらざばなにを期せんや。

この文は、選択本願念仏に帰するというこの内実を、  
称名念仏における「兆載永劫の修行」の自証として指示し  
ている。すなわち、「もはらわが名号を念ぜんものをむか  
へんとちかい給」う選択本願は、自力の無効性への徹底的  
信知、

決定深信<sup>シテ</sup>自身<sup>ハ</sup>現是罪惡生死<sup>ノ</sup>凡夫曠劫<sup>ヨリ</sup>已來常没<sup>シテ</sup>常流<sup>ニ</sup>  
転<sup>シテ</sup>無<sup>ク</sup>三有<sup>ニ</sup>出離<sup>ス</sup>之縁<sup>一</sup>

と善導の表白した「無有出離之縁」の自身の深信として自  
証されるといふことである。それが名号を体としての「兆  
載永劫の修行」ということである。親鸞が仏意釈において  
名号を体としての至心、至心を体としての信樂、信樂を体  
としての欲生という展開次第において思索していることも、  
このことを他にはないであろう。

この具体的内容については、三心それぞれの主題に即し

ての吟味をする必要があるが、本論の主題である「建言我  
一心」に問題を集約する意味で、信樂釈を中心に考えてお  
くことにする。至心釈を受けての信樂釈は、すでに字訓釈  
の展開でも領解できることであるが、信心ということの具  
体的内実をもっとも端的に語っている。

次言<sup>ニ</sup>信樂<sup>ト</sup>一者<sup>ハ</sup>則是<sup>ニ</sup>如来<sup>ノ</sup>満足<sup>ノ</sup>大悲<sup>ノ</sup>円融<sup>ノ</sup>無碍<sup>ノ</sup>信心<sup>ニ</sup>海<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>  
疑蓋<sup>無<sup>ク</sup>ニ</sup>三有<sup>ニ</sup>二間<sup>ニ</sup>雜<sup>ニ</sup>一故<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>信樂<sup>ト</sup>一即以<sup>テ</sup>利他<sup>ノ</sup>回向<sup>ノ</sup>之<sup>ニ</sup>至心<sup>ト</sup>為<sup>ス</sup>  
信樂<sup>ト</sup>一也然<sup>レ</sup>從<sup>テ</sup>無始<sup>ニ</sup>已來<sup>ニ</sup>一切<sup>ノ</sup>群生<sup>ノ</sup>海流<sup>ニ</sup>転<sup>シテ</sup>無明<sup>ノ</sup>海<sup>ニ</sup>沈<sup>ニ</sup>  
迷<sup>シ</sup>諸有<sup>ノ</sup>輪<sup>ニ</sup>繫<sup>テ</sup>縛<sup>テ</sup>衆苦<sup>ノ</sup>輪<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>清淨<sup>ノ</sup>信樂<sup>一</sup>法爾<sup>ト</sup>無<sup>ク</sup>真<sup>ニ</sup>  
実信樂<sup>一</sup>是以<sup>テ</sup>無上<sup>ノ</sup>功德<sup>ノ</sup>難<sup>ニ</sup>巨<sup>ニ</sup>值<sup>テ</sup>遇<sup>ス</sup>最勝<sup>ノ</sup>淨信<sup>ノ</sup>難<sup>ニ</sup>巨<sup>ニ</sup>獲得<sup>一</sup>  
一切<sup>ノ</sup>凡小<sup>ノ</sup>一切<sup>ノ</sup>時中<sup>ニ</sup>貪愛<sup>ノ</sup>之心<sup>ノ</sup>常能<sup>テ</sup>汚<sup>ス</sup>善心<sup>一</sup>瞋憎<sup>ノ</sup>之心<sup>ノ</sup>常能<sup>テ</sup>  
燒<sup>ス</sup>法財<sup>一</sup>急作<sup>テ</sup>急修<sup>一</sup>如<sup>シ</sup>灸<sup>ニ</sup>頭<sup>ニ</sup>然<sup>ル</sup>衆名<sup>ノ</sup>雜毒<sup>ノ</sup>雜修<sup>ノ</sup>  
善<sup>一</sup>亦名<sup>ニ</sup>虛假<sup>ノ</sup>諛偽<sup>ノ</sup>之行<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>三名<sup>ニ</sup>真<sup>ノ</sup>実<sup>ノ</sup>業<sup>ト</sup>也、以<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>虛假<sup>ノ</sup>  
雜毒<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>善<sup>一</sup>欲<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>無量<sup>ノ</sup>光明<sup>ノ</sup>土<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>必<sup>ズ</sup>不可<sup>ク</sup>也何<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>故<sup>ト</sup>由<sup>テ</sup>  
如<sup>レ</sup>來<sup>ノ</sup>行<sup>ニ</sup>菩薩<sup>ノ</sup>行<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>三業<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>修<sup>ノ</sup>乃<sup>チ</sup>至<sup>ス</sup>一念<sup>ノ</sup>刹那<sup>ノ</sup>疑蓋<sup>ノ</sup>無<sup>ク</sup>  
雜<sup>ニ</sup>斯<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>者<sup>ハ</sup>即是<sup>ニ</sup>如来<sup>ノ</sup>大悲<sup>ノ</sup>心<sup>ト</sup>故<sup>ニ</sup>必<sup>ズ</sup>成<sup>ル</sup>報<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup>正<sup>ノ</sup>定<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>因<sup>ト</sup>如<sup>レ</sup>  
來<sup>ノ</sup>悲<sup>ノ</sup>憐<sup>ノ</sup>苦<sup>ノ</sup>惱<sup>ノ</sup>群<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>海<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>無碍<sup>ノ</sup>廣大<sup>ノ</sup>淨信<sup>ノ</sup>一<sup>レ</sup>回<sup>シ</sup>施<sup>ス</sup>諸有<sup>一</sup>  
海<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>名<sup>ニ</sup>利他<sup>ノ</sup>真<sup>ノ</sup>実<sup>ノ</sup>信心<sup>ト</sup>一

まず親鸞は信樂が「如来の満足大悲円融無碍の信心海」  
であると言い切ってくる。この表現には涅槃の真因という

ことと、本願成就ということが一抛に語られている。いかなる悪業煩惱にも碍げられることなく、「一切群生海」において大悲を満足していく如来誓願成就としての「信心海」が信樂であると親鸞は語る。それは私が信ずるという意味の信ではなく、「利他回向之至心」を体として「一切群生海」を照見したもう「如来の大悲心」との値遇としての信である。『教行信証』化身土巻において親鸞が悲嘆を以て語ってくる、

悲哉<sup>シヤカチ</sup> 垢彰<sup>ノ</sup>凡愚<sup>ノ</sup>自<sup>ニ</sup>從<sup>ル</sup>無際<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>來<sup>ル</sup>助<sup>カ</sup>正<sup>カ</sup>間<sup>カ</sup>雜<sup>カ</sup>定<sup>シ</sup>散<sup>シ</sup>心<sup>ノ</sup>雜<sup>カ</sup>故<sup>ニ</sup>  
 出離<sup>シ</sup>無<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>期<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>度<sup>ヘ</sup>度<sup>ニ</sup>流<sup>ル</sup>轉<sup>ル</sup>輪<sup>ル</sup>回<sup>リ</sup>超<sup>ス</sup>過<sup>ス</sup>微<sup>シ</sup>塵<sup>ノ</sup>劫<sup>ノ</sup>一<sup>ハ</sup>旦<sup>ニ</sup>  
 婦<sup>シ</sup>私<sup>ニ</sup>願<sup>ス</sup>力<sup>ニ</sup>一<sup>ハ</sup>旦<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>大<sup>ニ</sup>信<sup>ス</sup>海<sup>ニ</sup>良<sup>ク</sup>可<sup>ク</sup>傷<sup>ム</sup>嗟<sup>ム</sup>深<sup>ク</sup>可<sup>ク</sup>悲<sup>シ</sup>歎<sup>ム</sup>  
 という表白は、信樂の性格を「難信」ということで逆に浮き彫りにしている。すなわち、信樂は人間から発す信ではなく、

大信心海甚<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>巨<sup>ク</sup>入<sup>リ</sup>從<sup>ル</sup>私<sup>ニ</sup>力<sup>ニ</sup>發<sup>ス</sup>起<sup>ス</sup>故<sup>ニ</sup><sup>④</sup>

と言われるごとく、「利他回向之至心」を体として「仏力從り發起する」信なのである。果成（仏力）より因位（大信心海）を開く信なのである。そこに「無有出離之縁」という深信が必然するのである。

「利他回向之至心」を体として展開する信樂積は、『觀經疏』至誠心積をより具体的に徹底することにおいて、信樂

が「利他眞實の信心」であることを明確にしている。信樂積に語られる「一切群生海」の具体相は、同時に本願に乗托して深信される自身の「無有出離之縁」の全貌である。そこに明らかになるのは人間存在は本願成就に関わって徹底の反逆態であり、拒絶態であるということである。それは私性を超えて仏道を求め得ないという人間の姿である。罪福信に立ち、功利性に執われ、「虚仮諂偽之行」、「虚仮雜毒之善」によって仏果を求めると指摘されてくる人間の修道の姿である。個人的能力に依拠した修道は結局、個人の功利性を超えることはできない。修道の全体が、「利他眞實」、私性を雑えない清淨眞實に逆位しているのである。その限り、個人に根拠しておこなわれるいかなる修道も個人を超えることは有り得ない。この不可能性の信知、「必不可也」という教勸を身に受けての、「無有出離之縁」なる今現在の自身の深信に開かれるのが、「如来の満足大悲円融無碍の信心海」である。

このような私積による確かめにおいて親鸞は直ちに『大經』第十八願成就文の前半部分を文類する。至心積、欲生積では「是以」という接続詞によって私積を受けて『大經』の文が類聚されるのに対して、信樂積ではそれ自体が単独の一文として考えられている。しかも、この願成就文

の指示は、後の欲生積の文とは異なり（欲生積では、「本願欲生心成就文」となっている）、

本願信心願成就文<sup>④</sup>

という重層した表現になっている。「本願信心成就」でも、「信心願成就」でもなく「本願信心願成就」と語られるのは、本願成就ということは信心獲得のほかにはないという指摘である。本願成就は信心の願成就であり、信心の願成就、獲信のほかには本願成就はないのである。

親鸞は信楽をこの『大経』の本願成就文によって確かめ、その内実を『如来会』の文によって「一念の淨信」の「能発」として押え、さらに『涅槃経』『華嚴経』によって信楽が仏性であり、無上菩提の因であり、信楽を獲得した者は如来と等しい位を得るといふ、信楽の性格と利益についての長大な要文類聚をおこなった後に、『論註』の二文によって信楽積を総結する。

論註日名ニ如実修行相應ト是故論主建言ニ我一心ト曰  
又言経始稱ニ如是彰信為能入ト曰<sup>④</sup>

この文は「論註」を通しての親鸞自身の世親への応答である。なぜ論主は「建に我一心と言たま」うたのか。このことはさらに同時に積尊への応答ともなっている。なぜ「経の始めに如是と称する」のか。まさに「我一心」とは

「世尊」への応答なのである。「如実修行相應」という仏教の本質的課題性、なぜ仏意に称うことができるのか、どうして仏説に如是と信順できるのかということ、一心によつてのみ答え得るのである。「一切群生海」を場として果成より因位を開く如来大悲誓願は、その姿は信順を装うにしても積尊に対抗し出離を自力によつて果しとげようとする衆生の行修を「必不可也」と否定することにおいて、衆生を涅槃にいたらしめんとする願である。この願心に帰するところに、積尊との出遇いがはじめて成就するのである。自力無効の信知が同時に積尊との出遇いである。

一切衆生をして無上大涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御な<sup>④</sup>

に如実に相應する自己、それは「無有出離之縁」と深信される自身に他ならない。自力無効と深信される自身が同時に大悲誓願に乗托する自己である。それこそは大聖世尊の教法の前に投地された、はじめにある我、仏弟子の姿であると言えるであろう。『尊号真像銘文』はこの消息を端的に語っている。

「世尊我一心」といふは、世尊は釈迦如来なり、我とまふすは世尊菩薩のわがみとのたまへる也、一心といふは教主世尊の御ことのりをふたごころなくうたがひ

なしとなり、すなわちこれまことの信心也。<sup>①</sup>

三一問答は再び『論註』の「建言我心」の文によってその全体が締めくくられていくが、この「如実修行相應」と「深信自身」の呼応を内景とする一心こそ涅槃に能入する信心であるということが、経文、釈文、三一間答を通しての親鸞の結論であると思われる。不充分ながら課題を残したまま本稿を終えておきたい。

註

- ① 『教行信証』(定本卷一、一〇一頁)
- ② 同 (同 一〇二頁)
- ③ 同 (同 一二二頁)
- ④ 同 (同 九五頁)
- ⑤ 同 (同 九五頁)
- ⑥ 同 (同 九五頁)
- ⑦ 同 (同 九五頁)
- ⑧ 『漢語灯録』(真聖全卷四、三五二頁補註―筆者)
- ⑨ 『西方指南抄』(定本卷五、一二二頁)
- ⑩ 『和語灯録』(真聖全卷四、六〇五頁)
- ⑪ 『教行信証』(定本卷一、二七六頁補註―筆者)
- ⑫ 同 (同 二九二頁)
- ⑬ 『選択集』(真聖全卷一、九九〇頁、原文漢文)
- ⑭ 『教行信証』(定本卷一、一一三頁)
- ⑮ 『往生要集』(真聖全卷一、八一六頁)
- ⑯ 『正像末法和讃』(定本卷二、一六五頁)
- ⑰ 『正像末法和讃』(定本卷二、一六六頁)
- ⑱ 同 (同 一六四頁)
- ⑲ 同 (同 一六五頁)
- ⑳ 同 (同 一六五頁)
- ㉑ 『浄土和讃』(同 四四頁)
- ㉒ 『教行信証』(定本卷一、一一四頁)
- ㉓ 同 (同 一〇〇頁)
- ㉔ 同 (同 九五頁)
- ㉕ 同 (同 九五頁)
- ㉖ 同 (同 九六頁)
- ㉗ 『浄土文類聚鈔』(定本卷二、一五二頁)
- ㉘ 『教行信証』(定本卷一、九七頁)
- ㉙ 『一念多念文意』(定本卷三、一二七頁)
- ㉚ 『尊号真像銘文』(同 四四頁)
- ㉛ 『唯信鈔文意』(同 一五五頁)
- ㉜ 『教行信証』(定本卷一、一一五頁)
- ㉝ 同 (同 一六六頁)
- ㉞ 同 (同 一六六頁)
- ㉟ 同 (同 一六六頁)
- ㊱ 同 (同 一六六頁)
- ㊲ 同 (同 一六六頁)
- ㊳ 同 (同 一六六頁)
- ㊴ 同 (同 一六六頁)
- ㊵ 同 (同 一六六頁)
- ㊶ 同 (同 一六六頁)
- ㊷ 同 (同 一六六頁)
- ㊸ 同 (同 一六六頁)
- ㊹ 同 (同 一六六頁)
- ㊺ 同 (同 一六六頁)
- ㊻ 同 (同 一六六頁)
- ㊼ 同 (同 一六六頁)
- ㊽ 同 (同 一六六頁)
- ㊾ 同 (同 一六六頁)
- ㊿ 同 (同 一六六頁)



- ④6 『教行信証』(定本卷一、三〇八頁)
- ④7 同 (同 二九四頁)
- ④8 同 (同 一二一頁)
- ④9 同 (同 一二七頁)
- ⑤0 『唯信鈔文意』(定本卷三、一五六頁)

⑤1 『尊号真像銘文』(同 八六頁)

定本——『定本親鸞聖人全集』  
真聖全——『真宗聖教全書』

(本学専任講師 真宗学)